アクター

小松あきひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アクター

【Ｎコード】
Ｎ９９３５Ｕ

【作者名】
小松あきひこ

【あらすじ】
一人は復讐のために。一人は野望のために。一人は欲望のために。操られながら演じているのだろうか？

エチュード

車は、怪しまれないように、一定の速度で走っている。信号が赤になるたびに後部座席の男は、キョロキョロと回りのようすをうかがっている。

信号が青に変わった。

「おい！　静かに。目立たないように出すんだ。」

男は、運転席の男に命令した。男の名は、草野誠司という、小悪党である.

他の車との距離が狭くなると、

「変な気を起こすんじゃねぞ！」

と、手に持った銃をチラつかせながら威圧する。運転する男は、唾を飲み込むとハンドルを両手で握りまっすぐに前を見ながらうなずいた。

「とにかくまっすぐ走るんだ！」

草野は、大きく目を見開きシートに身を沈める。

時刻は、２２時。

草野の安物の腕時計から?ピピッ?と電子音が鳴り響いた。携帯電話を握りしめ、腕時計に目を落とした。約束の時刻になっても着信がない。

（頼む。電話してくれ。頼む。）

イラついた顔を見られないように、左手で顔を隠した。

（ちょっとした手違いだぜ。俺は、しくじっちゃいねえ……。　）

すれ違う車のライトを浴びながら男は考えつづけた。

（畜生……。どうすりゃいいんだ?　）

時刻は、２０時。

駅裏の小さなラーメン屋を出ると、駅のベンチに座り手順を頭に浮かべた。
（夜９時に店が閉まる。夜８時５０分に店に入り、出口に近いショーケースを見るふりをする。いつものように、閉店の５分前に売上金を集めに本店の男がやってくる。）
店の様子を思い描きながら、左手の紙袋の中の物を見て一人うなずいた。
（その男の背にコイツを突き付けて、金を紙袋に入れるように言う。後は逃げるだけだ）
草野は、計画した逃走ルートを頭に描く。
目標の宝石店のあるビルの、横の路地に昨夜隠した自転車で、２街区先のビルの路地まで走る。そこで自転車を乗り捨てて地下道の入口から地下の駐車場へ行き、後藤のダンナの車に乗り込む。
（時間にうるさいダンナのことだ、約束通りに来るだろう。来なきゃ、ダンナも都合悪いから……。）
草野は、後藤のダンナからもらった安物の腕時計を見た。大きな伸びをしたあと、力強く立ち上がり歩きだす。
（こんどの仕事（ヤマ）は簡単な仕事（ヤマ）だ、なんてことないさ。）
草野は、逃走ルートを逆に宝石店を目指し、時間を調整しながら歩く。途中の路地で用意したカツラとヒゲで変装して。
（あとは防犯カメラに顔が写らないようにすれば、足はつかないだろう。）
そもそも、この仕事（ヤマ）は、店に対する嫌がらせが目的で強盗そのものではない。だから、金を入れるように紙袋を突き出して用意させている間に逃げるという簡単な仕事（ヤマ）だ。被害額も少なく、怪我人も出ない事件となると、警察だってそんなに暇じゃないさ、本気で捜査しないだろうとたかをくくっていた。
店のビルの路地にくると、昨夜用意していた自転車の鍵を外して、すぐに使えるようにした。もう一度、
（なあに、簡単な仕事（ヤマ）だすぐに終わるさ）

と、言い聞かせた。

時刻は、２０時４５分。

店の前に来ると、昨夜と同様に右側の本屋と左側の花屋は、シャッターを降ろしていた。店の前のパーキングメーターには宝石店の集金の車が停まっている。

この車の主は、事前の情報通り毎日２０時半過ぎに来ては、向かい側のハンバーガーショップでコーヒーを飲み。計ったように２０時５５分に店の売上金を取りに行く。強盗を計画するならば、このタイミングが一番だろう。

草野は、店に入った。

「いらっしゃいませ。」

奥から女性の声がした。声の方向に目をやり店員の位置を確認した。

店員は、一番奥のカウンターから笑顔を送ってきた。

草野は、目を合わせずに軽く会釈すると、計画通りに出口に近いショーケースを覗きこむ。

（店内には、あの女が一人か。もう一人は奥にいるのか？）

そろそろ閉店の時刻であるのか、もう一人の店員は奥から出てこない。カウンターに居る店員は、閉店間際に入ってきた草野を警戒する様子もなく、壁の時計に目をやった。

「ご用向きがございましたら、お申しつけください。時間の方もお気になさらずゆっくりとご覧ください。」

閉店の時刻をきにしないように言いながら、早く閉めたい気分が逆に伝わってくる。

（どうやら買う気がないってことを、見透かされてるのか？）

草野は動揺を隠すために、ショーケースを食い入るように見た。いや、ショーケースの表面に映る入口を見ていた。

店員は、草野に買う気がないと悟り、奥のショーケースから鍵を

かけ始めた。と、その時、集金の男が入ってきて草野に目をとめて
「いらっしゃいませ」
と、言いながら、通り過ぎようとした。その瞬間、草野は男の背後に立ち、
「騒ぐんじゃねぞ！　静かにしないとぶっ放すぞ！　」
と、男の背に銃を突き付けた。
「は……　はい。」
怯える男の背に銃口を押し当てながら、女にも聞こえるように大声で言う。
「女に騒がねように言え！　金をこいつにいれるんだ！　」
店員達は、草野の言う通りに渡された紙袋に金を入れようとしていた。
（俺の仕事は、これで済んだ。あとは、ショーケースのガラスを1、2枚たたき割って逃げるだけだ）
草野は、ためらうことなく店の男を突き飛ばし、拳銃でショーケースのガラスをたたき割ると、走り出した。計画した通り自転車のある路地へと、必死に走った。背後に『強盗！』と連呼する声を聞きながら。
ビルの角を曲がり準備してある自転車に飛び乗る予定だった。
（？　畜生！　自転車がない！　）
自転車が無くなっていた。背後からは、罵声と足音が迫ってくる。考える余地もない。予定のルートを走るだけだった。
（畜生！　畜生！　ついてないぜ……。　）
とにかく無我夢中で路地を走った。ごみ箱を蹴飛ばしながら。
路地を抜けると片側2車線の道路にでる。予定では、その道路を自転車で突っ切り、さらに1街区走り抜けるはずだった。
（畜生！　逃げてやる！　逃げてやる！　）
草野は、鬼のような形相で走り続けた。
路地を抜けたところに、車が1台ハザードランプを点灯させて停車していた。しかも、都合がいいことに後ろの座席のドアが開いて

いた。
（車だ！　俺はまだついてるぜ！　運が残っていたぜ！）
まるで吸いよされるように飛び乗ると、運転席に向かって銃を突き出して車を出させた。車はキキッーと猛スピードで走り去った。

あれから、1時間ほど走り続けていた。ときおりすれ違うパトカーに、ビクッとすることもあるが、運転席の男に見透かされないように虚勢をはっていた。
（こんなはずじゃなかったのに。俺は、捕まらねいぞ！　逃げてやる！　）
「何だテメー！　チラチラ見るんじゃね！　」
バックミラー越しにようすをうかがう運転席の男に叫んだ。
（そろそろ、この車も足がつくころだろう。）
車は、命じられたままにまっすぐに走っている。県境の山間部へと。
時刻は、22時15分。
「……ど、どこまで走ればいいのですか？　」
「ずっと真っすぐだ。いいと言うまで真っすぐだ。」
運転席の男は、怯えた表情で背を丸めながら前だけを見ていた。
（どうして？　電話がないんだ？　）
草野は、携帯電話を握り締めた。依頼主の話では、22時に電話をかけてくることになっていた。無事に仕事が終わったあと、後金の受け渡しの指示を受けるために。しかし、今は、これからの逃走の助けを求めるために連絡が欲しかった。
（仕事は、ちゃんと済んだんだ。ちょっとした手違いでこうなっただけなんだ……。）
草野は、自らに言い聞かせるように。落ち着かせるためにも、何度も何度も言い聞かせた。
週末のこの時間帯、ラジオはどの番組もニュースをやっていない。

草野は、事件がどのように報道されているのか、気が気でなかった。車は、郊外の新しい商業施設ゾーンに入った。片側2車線の道路の左右に大型のショッピングセンターがある。右手の店舗は24時間営業らしく、この時間帯でも車の出入りが多かった。

草野は、この先の山間部で運転席の男を降ろし。山を越えた辺りで車を捨て。そこから2キロ程歩いたところにある、高速道路のサービスエリアにつながる。高速バスのバス停への階段を使って、人ごみに紛れて早朝のバスで逃げることを思いついた。幸いにも変装したままだったから運転席の男に、はっきりと見られてはいないだろう。

（コイツは、ビビッてるから。俺の顔をまともに見ていないはずだ。）

いっそのこと、殺してしまおうか？　一瞬、頭をよぎったが、

（俺は、人殺しなんかじゃねえ……　あれは仕方なく……　でも、事故だったんだ。）

と、思い直した。

インテルメッソ

梅雨だというのに雨も降らず、ただ蒸し暑い日が続いていた、２ケ月前。

１年前に出所して、後藤のダンナに世話してもらった仕事も辞めちまって、手持ちの金も少なくなっていた。

（仕事を探すって言ったって、刑務所帰りの男なんか、どこも使ってくれねだろう。ダンナには悪いが、またどこか世話してもらうか？）

草野は、後藤のダンナを繁華街のパチンコ屋の角で待ち伏せしていた。『後藤のダンナ』と呼ばれる男とは、刑事の後藤憲一。元は交通課だったが、今は刑事課に配属されている。とかく黒い噂がある刑事である。

草野は、根っからの悪人ではなく、いうなれば半端者である。主に窃盗や詐欺の常習だったが、３年前に交通事故で人を殺してしまって服役していた。刑事の後藤とは、若い頃からの腐れ縁である。

「後藤のダンナ！。」

草野は柱の影から後藤の背後に回り、声をかけた。

「フン！　居たのはわかってんだぞ！　」

「おのそれいたします。」

「刑事（デカ）の背後を、勘づかれずに取ろうなど。お前みたいなチンピラが！　」

「まあまあ――　。そう怒らなくても……。」

草野は両手を前に出してなだめるような仕草をした。

「お前、仕事辞めちまったんだってな！　何やってんだ！　」

「す、すいません。ちよっと若いのと反りが合わなかったもんで……。　」

後藤は草野を睨みつけていた。

「俺もずいぶん我慢したんですよ。」

草野は、悪びれる様子もなく、タバコをせがむ仕草をした。
「ほらよ。くれてやるよ。」
ポケットから箱ごと草野に手渡した。
「これから、どうするつもりなんだ？　」
「また、世話して貰えませんか？　お願いします。」
後藤は足元に視線を落とし、メモを渡した。
「しょうがねえや。ここに明日にでも電話しろ。俺からの紹介だと言えばいい。」
「ダンナ。いつもすいません。」
後藤は、草野に憎悪の目を向けていた。
（こいつ、俺に付きまといやがって！　）
「いいか、明日電話しろよ！」
言い捨てて歩き出した後藤に向かって、
「ダンナ。また、大きな仕事（ヤマ）をさせて下さい。まとまった金が欲しいんです。」
断れねえはずだ。と、言わんばかりの語気だった。
「おい草野。俺は刑事（デカ）だぞ。尋ねるところを間違っちゃいないか？」
「おっと、そうでしたね。ダンナは刑事（デカ）だった。」
後藤は、チェッと舌打ちをして歩きだした。
「とにかく、明日電話しろよ。」
後藤の背には、草野への殺気が満ちていた。

２２時１９分。
車は郊外の一本道を走っている。前方に見えるトンネルを抜けると民家もまばらになってくる。草野はトンネルを抜けるとすぐの三差路を右折するように運転席の男に命じた。
（せめて、後藤のダンナにでも連絡がつけば、なんとかしてくれる

かもしれない……）

草野は、額の汗を拭うと、祈るような目で携帯を見つめ続けた。後藤には、逃走の手助けをさせようと番号を教えてある。時間には厳しいダンナだから、駐車場に来なかっただけで不審に思っているだろう。

握り締めた携帯から振動が伝わってきた。草野は、後藤からの着信を確認すると電話にでた。

「も、もしもし。ダ、ダンナ！」

「おい、草野か？　お前の仕業なのか！」

「ダ、ダンナ！　た、助けて下さい！」

「お前、どういうことなんだ？」

「ダンナ……。とにかく、た、助けて下さい。」

「お前、ひょっとして。俺を、この俺を利用しようとしたのか？」

「す、すいません。ちゃんと言うつもりだったんです。」

「お前、なに考えてんだ！」

「ほ、本当にすいません。か、簡単な、チョロイ仕事（ヤマ）だったんで……。」

後藤は、語気を強めて草野をなじったが、助けて欲しいの一点張りで懇願するばかり。あきれ果てながらも、これまでの経緯を聞いた。

草野は、宝石店を襲撃し、後藤と待ち合わせた駐車場まで逃走し、何食わぬ顔で後藤が乗ってくる覆面パトカーに乗り込み郊外まで運んでもらう計画を立てていた。まさか、強盗犯がパトカーで逃走するなど思いもしないだろう。ダンナには、適当な用件を作って小銭でも掴ませておけばいいだろうと考えていた。

「お前、今どこに居るんだ？」

草野は後藤に現在地とこれから向かう場所を教えた。後藤は、すぐに助けに向かうと言い電話を切った。

（後藤のダンナなら、俺を逃がしてくれる。きっと逃がしてくれるさ。俺に喋られたらヤバイからな……。）

草野は後藤と連絡がついたことで、なんとかなるだろうと、少しホッとしていた。

長いトンネルを抜け、三差路を右手に曲がる。ゆるやかな登り坂を走ると、すれ違う車もほとんどない暗い山道である。草野は後藤と話した通り、山頂近くのスキー場の入口で運転席の男を降ろすつもりでいた。

冬期だけ開けてあるスキー場なので利用する人もなく、静かすぎるほどの静寂に満ちていた。車は速度を落としスキー場の入口の鉄柵の前で停車した。

「おい、降りろ！」

「は、はい……。」

草野は、銃をチラつかせて命令する。運転席の男は、両手を上げて車から離れて、鉄柵の前に立たされた。

草野は、男から取り上げた携帯電話を林の中に投げいれると、用意していた手錠を男に向かって投げた。

「鉄柵とお前の手を繋ぐんだ！」

手錠の片方を鉄柵にかけ、もう片方を腕にかけようとした、その瞬間。バーンと銃声がこだました。

「う、う……。」

左の太ももを撃たれた草野が苦悶していた。

目の前には、必死の形相で運転席の男が銃を構えて立っていた。

荒い息遣いが耳朶に響いた。

草野は、激痛に顔を歪めながらも手に持った銃の引き金を引いた。

カチャ、カチャと、軽い金属音がした。

（ど、どういうことなんだ……。）

遠のく意識の中で後藤の到着だけを待ちわびていた。

ノクターン

草野は後藤から受け取ったメモに書かれた番号に電話をかけた。電話の相手は、後藤から連絡を受けていたのであろう、すぐに来るように言い電話を切った。

仕事の内容は、ごく簡単なものだった。後藤が世話をした仕事先は、飲食店を数点経営する会社だった。草野はそこで女達をワゴン車に乗せて店と寮とを何度か往復する。あとは事務所でテレビを見ながら待機するだけ。たまに、たちの悪い酔客が来るとあしらったりすることもある。住居の提供もあり、なんとも待遇が良い仕事だった。

（さすがに、後藤のダンナの顔だな）

頭が下がる思いだった。

草野は、店の女達が住む寮の出入口の横の部屋に住むようになった。女達からは『寮長』と呼ばれている。楽な仕事なのだが、看守のように女達を見張っているようで、何度も刑務所（ムショ）暮らしをした草野にとっては皮肉なものである。

ある日、運転席で女達を待っていると、一番早く乗り込んだ女が、

「寮長。いい仕事があるのよ。いい仕事。」

と、一方的にメモを手に押し込みながら、耳元で囁いた。草野は女を呼び止めようとしたが、他の女達が次々に乗り込んできたため、問いかけるのをやめた。女も何もなかったような顔つきで化粧を直していた。

その日の夜、店への４度目の送りを終え、駐車場の前の公衆電話からメモの番号に電話をかけた。

低いしわがれた声の男が出た。草野は、女からメモを受け取って電話をしたことを告げた。男は手元のメモでも読むように指示をだした。繁華街の交番の横の薬局に行き、店員に女から渡されたメモを見せるようにと。

（なるほど、足がつかねえように、いろいろと回りくどい仕掛けだぜ。この電話の男にしろメモを渡した女にしろそれだけの役目で、仕事（ヤマ）のことなど知らないのだろう）

草野は、依頼主や仕事のことよりも報酬のことばかりえを想像しながら薬局まで歩いた。

電話の指示通りに店員にメモを渡すと、カウンターの下から小さな紙袋を出した。メモの電話番号と紙袋に貼り付けてあるメモを照合して、間違いないことを確認して草野に手渡した。受け取ると店の外で袋の中を見た。携帯電話が一台だけ。電源を入れると、すぐに着信があった。

相手が、ボイスチェンジャーを使うほど用心深いことに、大きな仕事（ヤマ）なんだろうと勝手に思い込んでいた。まとまった金になれば殺し以外なら引き受けるつもりだった。

依頼された仕事の内容は、拍子抜けするほど楽な仕事だった。ただ、強盗のふりをして嫌がらせをするだけ。それだけで、報酬は５００万。引き受けるならばすぐに前金で半分を、終わってから残金を払うと。草野は、金に目がくらみ冷静な判断が出来なかった。あのとき、仕事の内容を聞いたときに、

（別に俺じゃなくても、誰でも出来る簡単な仕事（ヤマ）だが）

と、頭をよぎったが。

２２時３２分。

漆黒の闇の中で、草野の呻き声だけが響いていた。

「お前、だれなんだ……　だ……　」

男は、深く息を吸い込み、激しい息遣いを静めようとした。しかし、意に反して体は、ガチガチにこわばったまま、銃を降ろすことなく草野に近づいた。

「こ、殺さないでくれ……」

「く、草野！　草野誠司だな！　」
草野は苦悶の表情で顔を見上げた。
「ど、どうして……　俺の名前を……。」
「俺を、よく見ろ。俺を！　」
男は、車のライトを背にしているせいか、顔がはっきりと見えなかった。
「……お前…だ、だれなんだ……。」
「俺は、この日を待っていた。お前に復讐するために。」
男は、さらに草野に近づいて草野の血に染まった足を蹴飛ばした。
「う！　あ――　。」
意識が薄れていこうとする草野の全身に激痛が貫いた。
「俺は、お前が3年前に殺した。山内徹の息子だ！　」
「ま、待ってくれ！　俺は、人殺しなんか……　。」
「忘れたとは言わせないぞ。お前は、お前は、俺のたった一人の肉親だった父を……　。父を、車で引き殺しやがった！」
草野は、3年前の交通事故を思い出した。あのときの男の顔が。フロントガラスに叩きつけられた男の目を思い出した。
あの目とそっくりな目が、目の前に立っていろ。
「や、やめろ……。撃つな……。あれは事故だった。事故なんだ……　。」
「嘘だ！　ウソなんかつくなーー。」
男はもう一度、草野の足を蹴飛ばした。
「あー、うあーー。……　。」
憐れな草野の叫び声だけが山の中にこだました。
「俺は、知ってるんだ。何もかも知っているんだ。事故に見せかけて……。」
草野は、銃口を額に突き付けられた恐怖に、少しづつ真実を語り始めた。ときおり気を失いそうになりながら喋り続けた。

３年前、草野は後藤に頼まれて交通事故を装って、横断歩道を歩く山内徹をはね飛ばした。
山内は、愛人の真奈美と二人で食事のあとスナックで、いつもより多く飲んで横断歩道の真ん中に立っていた。信号を無視して歩いていたことになっていた。すべてが仕組まれたことだった。草野は、打ち合わせ通りに山内徹をはね飛ばした。そして、打ち合わせ通りに救急車を呼び、真奈美は駆け寄って泣き崩れ、すぐ近くにいた後藤のパトカーが現場に最初に到着した。あとは、後藤のシナリオ通りに警察と検察で事情を話すだけだった。
以外だったのは、不起訴にならなかったことだった。信号を無視した酔っ払いをはねた事故なんだが、ブレーキ痕が全くなかったことが実刑を免れなかった。刑期は、１年４ヶ月。人の命を奪ったにしては、軽すぎる。

山内徹の息子である山内勇一は、父を失った悲しみに悲嘆の日々を過ごしていた。唯一の肉親をなくした悲しみを背負うには、まだ若い勇一には堪え難いものだった。その苦しみは、加害者を憎しむことで堪えるしかできなかった。事故であることを、受け入れることができずにいた勇一は、一人、事故の事を調べはじめたのだ。そして、この事故が不自然なことに気づきはじめた。誰に聞いても、父は泥酔するほどに飲んだことがないという。もう一つは、どうして真奈美と離れて歩いていたのか？　泥酔していたのならば、なおさら一人で道路の真ん中を歩くなんて。湧きあがる疑問に対峙した時、悲しみの日々から這い上がらなければと、立ち上がったのである。父の死を受け入れたのではなく復讐をすために。
苦悶の表情で語る草野を見つめていた勇一は、草野の話しと調べた事実が一致していたことで、草野が嘘を言っていないと思った。そして勇一の心は、激しい殺意に満ち溢れた。
草野は出血の多さに次第に意識がもうろうとして気を失ってしま

った。
勇一は、草野を見おろし、
（この出血だ、そう長くは持たないだろう）
血の気が引いていく顔に、とどめを刺すのをやめた。
勇一は、車に戻ると、助手席の下に隠していた携帯電話を取り出して電源を入れた。圏外の表示に困惑の表情を浮かべたが、とっさにガードレールを越えて林の中を歩き出した。
（すぐに、後藤が追ってくるはずだ、とにかく急いで電話をしなければ、今度は俺がやられる）
電話が繋がるまで急いで逃げるしかない。勇一は、とにかく息をきらせて林の中を駆け落ちていった。
ズボンは枝で引っ掛けてボロボロになり、無数の傷口から出血していたが、夢中で走り続ける勇一には、何の痛みも感じなかった。
月明かりで時刻を見ると、２２時５３分。ほんの十数分間が１時間にも２時間にも感じた。
（早く圏外を抜けなければ……）

シンフォニー

勇一は、何度も立ち止まっては携帯を見た。まだ圏外の表示が消えない。もう少し移動しなければ、と暗闇の中を足場を確認する。生い茂る草の中で何度も足を取られては転倒した。

ハァー　ハァー　と息を切らせ、山頂への道路を見た。

（クソ！　もう来たか！　）

猛スピードで駆けあがる一台の車。

キキーとタイヤを鳴かせて走ってくる。勇一は木の陰から凝視していた。

（あいつだ！　後藤だ！）

テールランプが遠ざかるのを見届けて、再び転がり落ちるように麓を目指した。やがて、後藤が引き返してくるだろう。今度は、俺を仕留めるために。その前に、早く連絡をとらなければ……。

後藤は、猛スピードで駆けあがった。車が一台停まっているのを見つけると、拳銃を右手に持ったままゆっくりと近づいた。ライトをつけたままの車の先に、道路に転がっている人影が見えた。後藤は、銃を構え用心深く接近した。大量の出血で意識がもうろうとしている草野が、かすれた声で助けを求めていた。

「ダ、ダンナ！　ご、後藤のダンナ……。」

後藤が来たことに気がついたのか、残った力を振り絞り体を這わせようとしている。

「草野！　奴はどこに行った？　」

「下に……。　走って……。　ダンナ、た、助けて……。」

「草野！助けにきたぞ。」

「あ……。ありがとう……。　た、助かった……。」

「でもなあー。助けるのは、お前じゃねえんだ。」

後藤は、銃口を草野の腹部に押し付けた。
驚愕の表情の草野の顔を左手で押さえ付けて、
「俺を助けるためなんだよ。」
引き金を引いた。バーンと銃声が響いた。後藤は、草野の体を払いのけると、勇一が逃げた方向に走りだした。
ガードレール越しに林の中を見つめていた、
（草野め！　やっぱり喋っちまったようだ）
後藤は車から懐中電灯を取り出し逃走の跡を捜していた。折れた枝、不自然にしおれた草、えぐれたばかりの土。
（あの若造、この下を真っすぐに降りたようだな）
後藤は、勇一の先回りをして麓から追うことにした。車に乗り込むと、猛スピードで来た道を戻る。
（若造め、知らないでいいことを知ってしまいやがって。草野め、最後の最後まで俺の足を引っ張りやがる）

勇一は、車のライトが近づくのを見ると茂みに身を潜らせて行き過ぎるのを見ていた。
後藤は、ときおり車を止め、ガードレールから身を乗り出して林の中を懐中電灯で照らしていた。勇一を追い詰めるその光との距離は、次第に近づきつつあった。見つかれば、殺されるだろう。そして、俺は、強盗犯に殺されて山に捨てられたことにされ、あいつは、犯人を追いつめて、止むお得ずに射殺したことにするだろう。
（思い通りにさせるか！　絶対にアイツの悪事を暴いてやる！　）
勇一は、草野が語った一部始終を録音していた。
（これを公表すれば、俺も罪を負うことになるが、あの悪徳刑事を白日のもとに晒すことができる。）
後藤の車が、勇一の居る場所を通り越して山を下りて行く。一気の麓に向かって。
（アイツ、麓から俺を追い詰めるつもりなのか？　）

勇一は、まだ圏外から抜けきれぬ苛立ちを感じながら、見つからぬように移動を繰り返す。なんとか繋がってくれ！と、念じながら、何度も何度も発信ボタンを押す。後藤との距離に怯えながら……。

勇一の居場所から直線にして２００メートル程下に、後藤は車を停めた。勇一はこれ以上、山を降りることをあきらめ、逃げる方向を変えようとした。その時、電話が繋がった。微弱な電波に、切れるな！切れるな！　たのむ切れないでくれ！　と、祈りながら……。

「もしもし。勇一君か？」

勇一からの電話を田所は待っていた。

「た、田所さん。俺、怖い……です……。」

「勇一君、今、どこなんだ……。」

電波の状況が悪く、上手く話が出来なかった。田所は、助けに行くからとにかく逃げ続けるようにと、電話はそこで途切れてしまった。

勇一は、電話をその場所に置いたまま、今度は山肌を登りだした。下から追い詰められれば、上に行くしかない。あとは、田所がＧＰＳで場所を特定して助けに来てくれることにかけるしかない。それまで、逃げるしかない。

後藤は、車を停め。林の中に入って行った。暗闇に目が慣れるように懐中電灯を使わずに、

（早く仕留めないと、あとあと面倒だ）

後藤は、勇一が素直に麓に行かないように、わざと車を麓に停めた。ライトを山肌に向けたまま。

（普通の奴なら山を降りるのを止めて、来た道を逆に、山を登りだすはずだ。追われる奴は、皆そうするものだ）

さすがに百千練磨の刑事（デカ）である。追い詰めはじめると、まるで餌を求める禽獣のようである。暗闇に溶け込み耳を澄ませるて獲物を狙う。かすかな木の枝の音も聞き漏らすまいと。

（あの若造は、近くに居る……。必ず仕留めてやる。）
やがて、後藤は小さな光が点滅しているのを見つけた。用心深く、それでいて俊敏に行動する。
（携帯か、若造め！）
携帯を開き履歴を確認しようとしたが、ロックされていた。チエッと舌打ちをしながら岩に叩きつけた。
（早く仕留めなければ……）
後藤は、山肌を睨みつけた。

勇一は、携帯電話を置いてきた場所を見た。暗闇の中で何やらガサガサと木々が揺れていた。
（携帯が見つかったか？　もうそんなとこまで……）
もう、様子をうかがう余裕もなかった。ザワザワと木や草の音がしないように山を登っているつもりなのだが、急げば急ぐほど、パキッと枝を折ったりしてしまう。
（このままでは、追いつかれてしまう……）

後藤は、耳を澄ませて獲物をさがしていた。パサッパサッと葉の擦れる音がした。頬に水滴が当たった。
（ついてねや、雨か？）
水滴は、あちこちの木々に落ち、次第に山全体が雨音に包まれた。
（この雨が、俺に有利かそれとも若造か？）
時刻は、２３時４分。
（そろそろリミットだ）
後藤は、この雨音が逃げる者の油断になると本能的に気づいていた。
（逃げる者は、必ずこの雨音が救いだと思い込み、逃げ足を早めるはずだ）
山肌を凝視していると、不自然に木々が揺れ動くのを見つけた。
後藤は、その場所を目指し猛然と駆けあがる。

勇一は、雨音に紛れて移動しやすくなったと救われた思いだった。
すぐ近くに迫っていることも気づかずに。

ラプソディ

勇一が田所と初めて会ったのは、父が亡くなって1年程してからであった。

父の死を不審に思い興信所を使って調べあげたが、どの興信所も最後には、

「もう決着がついた事故だから」

と、どうすることも出来ないと言うばかりであった。調べたことは、一応真実らしいということ。つまり、確証がないということらしい。刑事裁判も民事裁判もすべて結審しており、犯人も服役中である。今さら、真実らしいと言うことで覆えすことは出来ないと。

勇一は何も出来ない自分の非力にうんざりしていた。なすこともなく悶々と過ごす日々、思い出すのは父との楽しい想い出ばかりだった。

勇一は、必ず復讐をすると誓い、そのことだけを目標にしてきた。そして、田所洋（タドコロヒロシ）と名乗る男にたどり着いたのである。

田所は、郊外の古い一戸建てを改装して『クリーンサービス』という看板をあげ、表向きは便利屋をやっている。便利屋といっても依頼のほとんどが掃除などだから『クリーンサービス』と名付けたと言うのである。郊外の住宅街では老人の一人暮らしも多く、何かと繁盛はしているが。そっちの方は、もっぱら人任せにして田所本人は探偵業が本業だと言っている。

勇一は、事故の調査を依頼した興信所の調査員に何度も頼み、裏稼業を請負う『事件屋』への連絡先を聞きだした。調査員は、固辞し続けたが勇一の想いに負けて、連絡の糸口を教えることにした。誰しもが簡単に依頼できる世界ではないのだ。

調査員は隣町の占い師を紹介した。そして、その占い師から便利屋の田所へと連絡された。田所は、用心深く勇一の事を調べあげ、

依頼を受ける事を占い師に連絡して勇一と会うことにしたのである。
　勇一の田所の印象は、まるで役者のよう、だった。彫の深い色男だった。ただし、役者のよう、と感じたのは顔つきではなく、その挙動である。まるで舞台を真近で見ているような、それでいて見る側に不快感を与えない。大袈裟な身振りに、豊かな表情、コメディー映画の主人公をほうふつとさせる。だが、いざ仕事となると同じ人物とは思えないほどに眼光鋭く、鋭利な刃物のようだった。
「で、山内さん。私になにを……。依頼されるんですか？」
　田所は、勇一から手渡された資料に目を通すと尋ねた。
「どうしても。どうしても復讐がしたいんです。」
「そうですか……。復讐といっても……。」
　田所は、腕を組み勇一を見た。不気味な微笑をうかべて、勇一の話を反芻した。勇一の計画とは、父を直接殺害した草野誠司に嘘の仕事（ヤマ）を持ちかける。草野は、割のいい仕事だと思ってすぐに乗ってくるだろう。仕事を請負わせて、うまく勇一の車に乗り込むように誘導し、人気のないところで準備していた銃で復讐を果たす。その際、草野に一部始終を喋らせて録音する。その場は正当防衛で犯人を撃ち殺してしまったことにする。
　田所はそこまでの勇一の話を聞いて、
「へえ～」
　と、つまらなそうな返事をしていた。
「で、刑事さんの方は？　どうする気ですか。」
　勇一は、草野にしゃべらせ録音したレコーダーを持ってメディアに公表するつもりだと言った。
　田所は、依頼を受けるにあたり、条件をだした。それは、後藤にたいする復讐は引き受けないこと。今回の依頼は、草野を殺して正当防衛で終わらせる事だけ。それ以上を望むなら、他の事件屋をあたるようにと。
　勇一は、それで充分だと思った。何も手を出せずに過ごしてきたんだ。せめて、実行犯である草野だけでも復讐ができればいいと。

勇一は、父と後藤との繋がりを憎悪に満ちた目で話だした。田所にとっては、すでに調査済みであり聞く必要もないのだが、この仕事の重要な一つの作業として、依頼主の心情を吐露させて、心を楽にさせてあげなければならないのだ。話しの途中で何度かうなずいたりと、この時が一番苦手だった。この苦痛をしのいでこそ依頼人は田所を信じ、委ねるのである。

勇一は、中学2年の時に母親を病気で亡くした。以後、父と二人で生活してきた。父は地場中堅の建設会社を経営していた。父は多忙だったが、勇一と過ごせる時間を大切にし、出来る限りの愛情を注いでいた。やがて、父に愛人がいることを知ったが、それも多忙な父の支えになってくれるのならばと、理解を示した。しかし、その愛人は、母の生前からの関係だと知った頃から、父との関係がギクシャクしてきた。

だが、勇一は父が好きだった。父を受け入れようとしていた。そんな矢先、事故で亡くなってしまったのだ。

勇一の父の山内徹は、愛人とその間に生まれた娘に遺言を残していた。全財産の半分を二人に遺贈すると書かれていた。勇一は、愛人の真奈美が依頼した弁護士の指示する通りに遺産分割の手続きに応じた。父の意志に添うように。唯一の肉親を失い、悲しみに暮れ続けている勇一にとっては、遺産だの父の会社だのと、どうでもいいことだった。悲嘆の中で生きることは、すべての力をもぎ取られていくようだった。大学受験もやめ、なすこともなく閉じこもり続けた。やがて、父の死に不審をいだき調査を依頼したり、自らも調べ始めた。

父の愛人の真奈美に、父の死後急接近していた人物がいた。それが、当時交通課の警察官だった後藤である。後藤と真奈美は同じ高校の同級生だった。いつからそうだったのかは、わからないが真奈美は父の愛人であった頃から後藤とも繋がっていたようだった。

この事故の計画を練ったのは、おそらく後藤だろう。山内徹に遺言を書かせ、真奈美が誘い出し。草野というチンピラを使って事故に見せかけて……。それから、真っ先に現場に駆け付けて、現場を保存するどころか証拠を捏造した。予定外だったのは、不起訴になる予定が運転手の『居眠り』ということになり実刑となった。

田所は忍耐強く話をきいていた。すべては、勇一と会う前に裏を取ってある。それぐらいの用心深さはこの稼業に必須なことだ。

話しが終わると、勇一に連絡用の携帯電話を1台手渡した。連絡は、

「すべて携帯(コレ)で」

と、言って別れた。

レクイエム

勇一は、雨音にかき消される足音に助けられたと思い、山肌を這いあがっていく。迫りくる後藤の姿を見てそうするしかなかった。勇一は、怖かった。執拗に追ってくる後藤が、今にも飛びかかってくる恐怖に……。

山肌が急になってきた。ついさっきは、ここを転げ落ちるように下っていたったんだが、上るとなると、木の枝をつかみ足場を探す。左手に木の根をつかみ時計を見た。

２３時２６分。

（田所さん。早く来てくれ。）

何度も何度も呪文のようにとなえていた。雨が次第に激しくなってきた。雨で足をすべらせた。左手でつかんだ木の枝に全体重がかかった。次の瞬間、バキッと枝が折れ、斜面を転がり落ちる。背をガードレールの柱に激しく打ち付けた。

「ウ……　ウッ……。」

勇一は、のたうち回りながらガードレールの下を潜って身を隠そうと必死だった。

「テメー！　ガキー！　」

背後から罵声とともに後藤が駆けあがってきた。

「クソガキ！　手間とらせやがって！　」

勇一は。もう駄目だと思った。自由に動かない体は生への執着を失わせていく。山を駆けまわって咽もカラカラだ。もうダメだろう、ここで殺されるんだと思った。

後藤は、ゆっくりと銃を構えた。ハアッ、ハアッと息を切らせていた。呼吸を整えて、乾いた唇を唾で湿らせた。

「ガキめ、悪いな。」

引き金を引こうとした瞬間。車のライトが後藤を照らした。後藤は、右手で銃を構え、左手で顔をライトから隠した。車は、二人の

真ん中に停まった。ドアが開き田所が降りてきた。
（あ……　田所さんだ……。助かった……。）
勇一は、もうろうとした目で道路に這いつくばって田所をみた。
「おい、田所。遅かったな！」
「すいません、すぐに出たんですがね。」
勇一は、ア然としていた。いや、かすんでいく意識の中で、自分の死体が横たわる情景だけが浮かんでいた。
「田所、後の処理は大丈夫か？　」
「大丈夫ですよ。抜かりはありません。」
「こいつの始末もいいか？　」
後藤は、田所に銃を渡そうとしたが、
「いや、勘弁して下さい」
と、後ずさった。
「じゃあな！　ガキ。」
勇一は、驚愕の表情で田所を睨んでいた。
バーン、乾いた銃声が響きわたったが、すぐに雨音に溶け込んでいく。
ドスン、と肉塊が崩れ落ちた。
背後から心臓を撃ち抜かれた後藤の体が道路に横たわっていた。
「た、田所さん……。」
「勇一君。大丈夫か？」
田所は、勇一のもとに駆け寄ると怪我の状況を確認していた。
「た、田所さん。あ、ありがとう……。」
勇一は、そのまま気を失っていた。赤いランプの点滅と、救急車の車内のデジタル時計のＡＭ１時１０分の表示だけを鮮明に覚えていた。

翌朝、病院のベッドの上で目をさました。両足の膝から下と両腕と頭に包帯が巻かれていた。医師の説明によると無数の切傷と打撲

だという。
　気になっているのは、警察がいつ事情を聞きにくるのか、だった。田所と連絡がつかないことに不安を感じていた。後藤が撃たれる直前の二人の会話も引っかかる。
　窓の外をぼんやりと眺めていると、看護婦が大きな花束を抱えてきた。
「キレイなお花が届いてますよ。」
（誰からだろう？）
　看護婦は、窓の近くの台の上に置くとメッセージカードが入った封筒を手渡した。
「花屋さんが、カードは手渡しして下さいって言ってましたから。どうぞ。」
（本当に誰からだろう？）
　勇一は、怪訝そうな顔で封筒を受け取った。それが、照れてるようにみえたのか、看護婦が微笑んでいた。
　封筒の中にはカードが一枚。差出人の名はないが、その字は田所のだとわかった。
「花束の真ん中に君の物がある。」
　と、ただこれだけ書かれていた。
　勇一は、誰も居なくなってから、すぐにそれをとりだした。勇一の愛用のレコーダーだった。勇一は苦笑していた。田所との約束を破ることになるが、どうしても、後藤への復讐をあきらめきれなかったのだ。
　勇一は、レコーダーの再生ボタンを押した。田所の声が聞こえてきた。田所は、まず初めに勇一のレコーダーを借用した礼を述べたあと、他の録音を消してしまったことを詫びた。
（あいかわらず、芝居っ気の多い人だ）
　田所が一人でレコーダーに向かい、あの挙動で話している姿を想像するだけでおかしかった。話しは、本題に入った。今回の一連の事情聴取が、医者の許可が出次第に開始されるだろう。そのために、

これからの説明を何度も聞いて暗記するようにと……。
勇一は、一週間ほどで退院出来るようになった。体の方は、ほとんど完治してるが、心理面のカウンセリングに通うようにと言われたので、一応の返事はしておいた。
警察での事情聴取は暗記の効果で無事に終了した。勇一は、被害者であるので参考程度に聞かれるぐらいであった。ただ、どうしても気に入らなかったのは、後藤が殉職扱いになっていたことである。

あれから3ヶ月。血みどろになって這いずり回った山肌は、紅葉が鮮やかな時期を迎えている。
勇一は、花束を抱えて足早に歩いていた。田所からの久しぶりの電話の用件は、気が乗らないものだった。住所を書いたメモを手に後藤の家にむかった。花を手向けるために。世間では、命を賭して被害者を守った英雄になっている。礼をいうのが心情であろうと。
勇一にとっては酷なことだったが、田所はあの芝居気たっぷりの口調で「最後の仕上げだから」と、背をおした。
(田所さんのいうことに間違いはない、結果的に僕の望み通りにもなったし)
勇一は、田所の言うとおりに、後藤の妻にお悔やみを言い、花を供えた。頭を下げて礼を言うふりをした。後藤の妻とは、ほとんど会話をしなかった。もともと長居をするつもりもなかったから丁重に辞した。
後藤の遺影は、立派な人物だったろうと思わせる写真だった。制服姿の後藤がキリッとした目で写っていた。なるほど殉職にはうってつけだ。
勇一は、後藤の家の玄関にたどり着くまで、田所の言葉を何度となく思い出した。
「殉職が気に入らないことは、良くわかる。しかし、死んでしまった奴に、死に方がどうだとか言うのかい？　もう死んだんだよ。奴

も、勇一君の言う『復讐』ってやつも……。」
（これで、すべて終わったんだ。）
本当に良かったのだろうか……。俺は死ぬまで問い続けるだろう。
たとえ復讐であったとしても、二人の人間が死んだんだ……。

ララバイ

その後、勇一は街を出た。この先の人生を送るには、この街は、あまりにも生々し過ぎた。

父や母との思い出と、あの血みどろの山や復讐だけを目的に生きた日々を忘れたかった。すべての想いを置いて出て行きたかったから。

街を出ることに決めて田所に連絡すると、いつもの芝居っ気たっぷりな態度ではなく、静かな口調で「さよなら」を言ってくれた。勇一にとっては，その「さよなら」でさえまだ芝居っぽく感じてしまう。

（たぶん、本当は照れ屋なんだろう。）

「田所さん。お元気で……。」

「勇一君もな。元気で……。」

（もう、会うこともないだろう。）

心からお世話になった礼を言うと、固い握手をして、別れた。

（本当に田所さんで良かった。もし、田所さんじゃなければ……。俺までも……。）

勇一は、事情聴取が終わったあと、どうしても気になっていたことを尋ねた。あの時、後藤に追い詰められた時に交わした、後藤と田所の会話と、二人の関係を。

勇一の質問に、田所は明快に答えた。

「こういう稼業だから、後藤さんは顔見知りだった。後藤さんは手柄のため、俺は仕事のために、ネタをやったりもらったりと。」

だからこそ、最初に勇一君の資料を見た時に、知り合いだという事は伏せておいたと言う。

「後藤さんは、刑事なんだ。腐っていても刑事なんだから、裏をかくことは至難の業だった。どうすればいいかと、いろいろと考えたよ。すると、後藤は草野につきまとわれて辟易していたことが分か

った。ゆすられてはいなかったようだが、五十歩百歩というところだろう。」

田所は、勇一の情報を後藤に流せば、必ず食いついてくると思った。そして、案の定、後藤は勇一を上手く利用して草野を葬り、さらに勇一までも仕留めようとしていた。多少のリスクはあったが、田所は慎重に、そして確実に仕掛けを施した。唯一、計算違いだったのは、後藤の動きが舌を巻くほどに早かったことだった。危うく勇一が殺されるところだった。

（しかし、俺は生きている。田所さんのおかげで。）

街を出て無事に年を越し節分も過ぎ、ますます寒気に覆われ一人の寂しさに堪えかねていた時、突然友人から食事に誘われた。なんでも、五月に同窓会をするのに数名で企画をしていたら、勇一の話題になり皆で食事に誘いだそうってことになったらしい。勇一も感傷的になって街を飛び出したものの、誰かの誘いを待ちわびていた。

あの街に帰るのは、気が引けたが、せっかくの誘いだ。皆と楽しく食事が出来る、と出かける事にした。

駅前のメインストリートを抜けると建物の壁面に、白雪姫の小人達に似たからくり人形と大小さまざまなベルが飾ってあるところがある。一時間ごとに、華やかなベルの音にのって人形達が踊りだす仕掛けになっていた。待ち合わせの場所としては、地元では有名なところである。

勇一の背後から、高らかにベルの音が鳴り響いた、待ち合わせ時刻の２０時ちょうどのベルである。

肩に落ちる小さな雪を払いながら、遅れてくる友人達を待つあいだ、息をハァーと吹いて白く煙らせていた。子供の頃によくやったものだった。ハァーと白く煙らせてはすぐに消えていく。ハァーと白くけむらせては……。

勇一は、道向かいのレストランに停めてある高級外車に向かってハァーと息を吹いた。目に映る車は、一瞬白く煙る、そしてすぐに消える。もう一度、ハァーと息を吹いて消えていったとき、見覚えのある顔が車のドアを開けていた。

（あっ！　田所さんだ！）

勇一は、声をあげて呼びかけようとしたが、助手席のドアを開けた一人の女性を見てそれをやめた。

二人の男女は、まるで恋人同士のようだった。田所と女性は、勇一に気づくこともなく車に乗り込み走りさった。

勇一は、テールランプをめがけて息をハァーと吹いた。白く煙る赤いテールランプはすぐに視界から消えていった。田所の乗った車の助手席には、まぎれもない、後藤の妻が乗っていた。恋人同士のように。

（そうか……　それで、殉職じゃなければならなかったのか……。）

あの芝居気たっぷりの田所の顔を思い出していた。何もかも、田所のシナリオ通りだった。勇一が考えた筋書きも、すべてが田所によって演出されていたなんて。そして、芝居をさせられていたのは、俺だったのか？

勇一は、そんな田所でさえも悪く思う気になれなかった。

（田所さんも達も、そして、俺も『生きる』という舞台の役者なんだろう。）

勇一は、空を見上げた。雪が舞う空に向かってハァーと息を吹きかけた。

（すべて終わったんだ。舞台の幕は降りた。）

遠くから勇一を呼ぶ声がした。遅れてきた友人達だった。勇一は友人達の方へ歩きだし、立ち止まった。もう一度、車が走り去った方を見た。赤いテールランプの幻影を追うように。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9935u/

アクター

2011年7月23日18時29分発行